

2016年1月6日

大崎市議会議長 佐藤 清隆 殿

一般社団法人 日本建築学会
東北支部長 源栄 正人



大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎の建替え計画に接し、地元市民による「田尻まちづくり協議会」が保存活用に関して検討されている由、うかがっております。

本建築は、1958（昭和33）年に竣工した現代建築であり、本会での評価はまだ定まっておりますませんが、同じ設計者による同じ形式の学校建築が他県において国登録有形文化財に登録されるなど、全国的に注目されており、これからの研究の対象に十分になりうる建築です。

本建築（次頁写真）を設計した坂本鹿名夫は、1911（明治44）年東京生まれ。円形平面による建築「円形建築」の合理性を主張し、数多くの「円形建築」を設計した建築家です。当時、彼の「円形建築」は世界でも話題になり、世界的建築家丹下健三は、坂本鹿名夫の「円形建築」を、米国人建築家フランク・ロイド・ライトや丹下健三自身のそれとは異なる、日本のかつ、独創的なものであると評しています。また、昭和30年代に流行し全国各地に建てられた「円形建築」は学校の校舎が多く、庁舎で現存する事例は本建築の他に聞かれません。従って、本建築は大変貴重な建築遺産と言えます。地域的観点から見ても本建築は、旧田尻町の成り立ちを後世に伝えるシンボルとして重要な位置を占めていると考えられます。しかし、本建築の最大の魅力はその形態です。全国の現存する「円形建築」は地域のランドマークとして親しまれています。本建築の屋上には360度のパノラマが広がっており、ここから田尻の風景を体感することができます。活用の可能性を秘めた建築でもあります。

貴下におかれましては、この貴重な建築の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、かけがえのない本建築を保存活用し後世に伝えていくために、どうか格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会は本建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

<大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎外観及び内観写真>



各写真とも、宮城県建築士会より提供

大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎についての見解

1) 建物概要

旧田尻町役場庁舎（3頁写真）は、宮城県大崎市東部、田尻地区のJR田尻駅近くにある。東京の「建築総合計画研究所」が設計し、1958（昭和33）年4月15日に竣工した。建物は、RC造3階建て、円形の平面形になっている。中心の吹き抜け及び螺旋階段の周囲に諸室を配置した合理的な間取りが特徴である。1954（昭和29）年に「建築総合計画研究所」を設立した坂本鹿名夫が提唱し建築されたいわゆる「円形建築」の一つである。階構成は、1階及び2階が各課の事務室や会議室など、3階は階段室と屋上になっている。屋上からは、360度のパノラマが楽しめる。中心の階段ホールに全ての課の窓口が開かれているので、利用者にとって大変わかりやすい空間構成になっている。構造形式はラーメン式構造で、吹き抜けの回りと外回りの外壁面に柱がある。階高は3.3m、軒高は7.2m、最高の高さは10.4mで、高さが抑えられている。意匠性は、中心部に設けられた吹き抜けの螺旋階段の造形（3頁写真）及びその最上部の照明器具のデザインなどに見られる。建築的には、外回りの窓のアルミサッシ化、設備の追加などの変更部分があるが、内外部とも建築当時の構造、意匠をと留めている。東日本大震災でコンクリートのひび割れといった被害があり、耐震補強が望まれる。

2) 歴史的価値

①設計者に関する評価

坂本鹿名夫は、1911（明治44）年東京生まれ。大学卒業後、大手建設会社勤務等を経て、独立した。円形建築の合理性や経済性を主張し、その考えに基づいた多くの円形建築を設計した。1959（昭和34）年の『円形建築 坂本鹿名夫作品集』の出版を機に、円形建築のブームを作った人物である。上記の本には、世界的建築家故丹下健三による推薦の言葉が掲載されている。丹下は、坂本の作品が『ライフ』米国版など海外誌で紹介されていることや、清家清がワルター・グロピウスの事務所に招かれた時に海外の建築家から坂本について質問されたことを記しており、彼の円形建築は、海外でも話題になっていた。さらに丹下は、フランク・ロイド・ライトや自分なども円形建築を試みているが、坂本の手法は、日本的かつ、独創的なものであるとも述べている。このように坂本鹿名夫は、海外においても注目される独創的な建築家であった。

②ビルディング・タイプとしての価値

坂本が設計した円形建築の用途は、学校、病院、住宅、講堂、庁舎といったものであり、これらの中でも学校が多い。その数は、『円形建築 坂本鹿名夫作品集』の出版時点で、100を超えていた。校舎でも、中心の吹き抜け及び階段の周囲に教室が配置される。従って、教室の平面が扇形になる。黒板は吹き抜け側に配置されるので、背面からの採光になっているところも特徴的である（福島東稜高校、1964（昭和 39）年）。校舎の中心部に廊下が設けられるので移動動線が短い。また、外壁面も円形平面によって形作られ、全て窓になるので、採光もとりやすい。一方で、使い勝手や避難上の問題もあり、取り壊しが進んでいる。しかし、卒業生らが保存運動を行っている事例（倉吉明倫小学校、1955（昭和 30）年）もあり、円形校舎に愛着をもつ人も多い。なお、1962（昭和 37）年に建築された三重県の朝日小学校は国登録有形文化財になっている。

一方、庁舎については、1961（昭和 36）年に建築された旧江刺市庁舎が近年解体され、本建築はビルディング・タイプとして大変貴重な遺構となっている。

③地域的観点からの評価

旧田尻町役場庁舎は、旧田尻町の合併を機に建築された。当時においては、地域性の異なる村々をたばねるシンボリックな性格をもつ建築が必要とされたと聞かれる。円形建築のデザイン性はその要望を満たすものであったのであろう。また、『田尻町史』に県内で初めてとなる円形庁舎の構想をとった理由として、工費の節減、広い土地を必要としないこと、採光や通風がよいこと、管理しやすいこと、外観が近代的であることが記されており、建築のデザイン性も注目されていた。このような地域の歴史を語る現代建築は町にとっても貴重なものあり、後世に伝える価値があると考えられる。

④景観上からの価値

大崎市田尻地区は、仙北平野の中央部に位置し、水田地が広がっている。庁舎の周辺は、現在は宅地になっているが、竣工時の西側や北側は耕地であった。つまり、目印になるようなものが少ないので、ユニークな外観がランドマークとしても機能していたと考えられる。前述した福島東稜高校も、信夫山を背景にした高台にあり、まずその外観に目を引かれる。中国の世界遺産「福建の土楼」の円形土楼建築もしかりである。このように円形建築は、景観的要素として見ても魅力がある。

3) まとめ・総合的価値

ビルディング・タイプとして大変貴重な遺構であり、地域的観点から見ても地域に欠かせない存在である。従って、後世に伝えるべき歴史的遺産と考えられる。

文責：相模誓雄

4) 写真



各写真とも、宮城県建築士会より提供

2016年1月6日

大崎市長 伊藤 康志 殿

一般社団法人 日本建築学会
東北支部長 源栄 正人



大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎の建替え計画に接し、地元市民による「田尻まちづくり協議会」が保存活用に関して検討されている由、うかがっております。

本建築は、1958（昭和33）年に竣工した現代建築であり、本会での評価はまだ定まっておりますませんが、同じ設計者による同じ形式の学校建築が他県において国登録有形文化財に登録されるなど、全国的に注目されており、これからの研究の対象に十分になりうる建築です。

本建築（次頁写真）を設計した坂本鹿名夫は、1911（明治44）年東京生まれ。円形平面による建築「円形建築」の合理性を主張し、数多くの「円形建築」を設計した建築家です。当時、彼の「円形建築」は世界でも話題になり、世界的建築家丹下健三は、坂本鹿名夫の「円形建築」を、米国人建築家フランク・ロイド・ライトや丹下健三自身のそれとは異なる、日本的かつ、独創的なものであると評しています。また、昭和30年代に流行し全国各地に建てられた「円形建築」は学校の校舎が多く、庁舎で現存する事例は本建築の他に聞かれません。従って、本建築は大変貴重な建築遺産と言えます。地域的観点から見ても本建築は、旧田尻町の成り立ちを後世に伝えるシンボルとして重要な位置を占めていると考えられます。しかし、本建築の最大の魅力はその形態です。全国の現存する「円形建築」は地域のランドマークとして親しまれています。本建築の屋上には360度のパノラマが広がっており、ここから田尻の風景を体感することができます。活用の可能性を秘めた建築でもあります。

貴下におかれましては、この貴重な建築の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、かけがえのない本建築を保存活用し後世に伝えていくために、どうか格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会は本建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

<大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎外観及び内観写真>



各写真とも、宮城県建築士会より提供

大崎市田尻総合支所（旧田尻町役場）庁舎についての見解

1) 建物概要

旧田尻町役場庁舎（3頁写真）は、宮城県大崎市東部、田尻地区のJR田尻駅近くにある。東京の「建築総合計画研究所」が設計し、1958（昭和33）年4月15日に竣工した。建物は、RC造3階建て、円形の平面形になっている。中心の吹き抜け及び螺旋階段の周囲に諸室を配置した合理的な間取りが特徴である。1954（昭和29）年に「建築総合計画研究所」を設立した坂本鹿名夫が提唱し建築されたいわゆる「円形建築」の一つである。階構成は、1階及び2階が各課の事務室や会議室など、3階は階段室と屋上になっている。屋上からは、360度のパノラマが楽しめる。中心の階段ホールに全ての課の窓が開かれているので、利用者にとって大変わかりやすい空間構成になっている。構造形式はラーメン式構造で、吹き抜けの回りと外回りの外壁面に柱がある。階高は3.3m、軒高は7.2m、最高の高さは10.4mで、高さが抑えられている。意匠性は、中心部に設けられた吹き抜けの螺旋階段の造形（3頁写真）及びその最上部の照明器具のデザインなどに見られる。建築的には、外回りの窓のアルミサッシ化、設備の追加などの変更部分があるが、内外部とも建築当時の構造、意匠をと留めている。東日本大震災でコンクリートのひび割れといった被害があり、耐震補強が望まれる。

2) 歴史的価値

①設計者に関する評価

坂本鹿名夫は、1911（明治44）年東京生まれ。大学卒業後、大手建設会社勤務等を経て、独立した。円形建築の合理性や経済性を主張し、その考えに基づいた多くの円形建築を設計した。1959（昭和34）年の『円形建築 坂本鹿名夫作品集』の出版を機に、円形建築のブームを作った人物である。上記の本には、世界的建築家故丹下健三による推薦の言葉が掲載されている。丹下は、坂本の作品が『ライフ』米国版など海外誌で紹介されていることや、清家清がワルター・グロピウスの事務所に招かれた時に海外の建築家から坂本について質問されたことを記しており、彼の円形建築は、海外でも話題になっていた。さらに丹下は、フランク・ロイド・ライトや自分なども円形建築を試みているが、坂本の手法は、日本的かつ、独創的なものであるとも述べている。このように坂本鹿名夫は、海外においても注目される独創的な建築家であった。

②ビルディング・タイプとしての価値

坂本が設計した円形建築の用途は、学校、病院、住宅、講堂、庁舎といったものであり、これらの中でも学校が多い。その数は、『円形建築 坂本鹿名夫作品集』の出版時点で、100を超えていた。校舎でも、中心の吹き抜け及び階段の周囲に教室が配置される。従って、教室の平面が扇形になる。黒板は吹き抜け側に配置されるので、背面からの採光になっているところも特徴的である（福島東稜高校、1964（昭和 39）年）。校舎の中心部に廊下が設けられるので移動動線が短い。また、外壁面も円形平面によって形作られ、全て窓になるので、採光もとりやすい。一方で、使い勝手や避難上の問題もあり、取り壊しが進んでいる。しかし、卒業生らが保存運動を行っている事例（倉吉明倫小学校、1955（昭和 30）年）もあり、円形校舎に愛着をもつ人も多い。なお、1962（昭和 37）年に建築された三重県の朝日小学校は国登録有形文化財になっている。

一方、庁舎については、1961（昭和 36）年に建築された旧江刺市庁舎が近年解体され、本建築はビルディング・タイプとして大変貴重な遺構となっている。

③地域的観点からの評価

旧田尻町役場庁舎は、旧田尻町の合併を機に建築された。当時においては、地域性の異なる村々をたばねるシンボリック的性格をもつ建築が必要とされたと聞かれる。円形建築のデザイン性はその要望を満たすものであったのであろう。また、『田尻町史』に県内で初めてとなる円形庁舎の構想をとった理由として、工費の節減、広い土地を必要としないこと、採光や通風がよいこと、管理しやすいこと、外観が近代的であることが記されており、建築のデザイン性も注目されていた。このような地域の歴史を語る現代建築は町にとっても貴重なものあり、後世に伝える価値があると考えられる。

④景観上からの価値

大崎市田尻地区は、仙北平野の中央部に位置し、水田地が広がっている。庁舎の周辺は、現在は宅地になっているが、竣工時の西側や北側は耕地であった。つまり、目印になるようなものが少ないので、ユニークな外観がランドマークとしても機能していたと考えられる。前述した福島東稜高校も、信夫山を背景にした高台にあり、まずその外観に目を引かれる。中国の世界遺産「福建の土楼」の円形土楼建築もしかりである。このように円形建築は、景観的要素として見ても魅力がある。

3) まとめ・総合的価値

ビルディング・タイプとして大変貴重な遺構であり、地域的観点から見ても地域に欠かせない存在である。従って、後世に伝えるべき歴史的遺産と考えられる。

文責：相模誓雄

4) 写真



各写真とも、宮城県建築士会より提供